

冬戦争の歴史的概要

政治学博士 オリ・クレモラ

背景

1920年代から1930年代の戦間期、フィンランドとソ連の関係は疑惑に満ちていた。

ソビエト・ロシアの指導者たちはフィンランドを社会主義国とするため、1918年のフィンランド内戦で赤軍を支援した。しかし、資本主義の白軍が勝利したことによりフィンランド政府はモスクワに根強い不信感を抱くようになった。

フィンランドの懸念はソ連の積極的な再軍備と自国を標的とした宣伝活動によってさらに増大した。

一方、ソ連ではフィンランドは敵国とみなされていた。

この態度はフィンランド指導者の反ボリシェヴィキ政策、フィンランド内戦後にロシアの地で起きたフィンランド民族間の分離主義的紛争、いわゆる親族戦争、そしてロシアの内戦で白軍を支持したフィンランドへの不信に基づいていた。

相互不信はソ連と国境を接するエストニア、ラトビア、リトアニア、ポーランドとの協力を模索する戦間期のフィンランド外交によってさらに悪化した。

1933年、ヒトラーによるドイツの政治権力の掌握は、ソ連指導者らにとって紛争の際のフィンランドの中立性を憂慮する理由となった。

1939年秋に国家社会主義(ナチス)ドイツと、共産主義国家であるソ連が予想外の相互不可侵条約、いわゆるモロトフ・リッベントロップ協定に署名したとき、東ヨーロッパをソ連とドイツの勢力圏に分割する秘密議定書が盛り込まれていた。

その文書でフィンランドはソ連圏に属すると定義されていた。



モスクワ会談から交戦開始まで

ナチス・ドイツは1939年秋にポーランドを攻撃し、その勢力範囲内を領土に併合し始めた。

ソ連はフィンランドとバルト三国をそれぞれモスクワに招待し、「時宜にかなった政治問題」について交渉することで圧力を加えた。

実際には、これは領土の割譲または交換の要求を示していた。

このような申し出は初めて議題に上ったわけではなく、1938年のいわゆるヤルツェフ会談にてヘルシンキのソ連大使館の公使館第二書記官ボリス・ヤルツェフが提示したものだ。

彼の本名はボリス・リブキンといい、外交官であると同時に秘密警察の代理人でもあった。

ソ連秘密警察(NKVD)は、フィンランドにドイツに対する秘密防衛協定を提案していた。

次に1939年3月の交渉中にソ連はフィンランドに対し、フィンランド湾東部の「島々」を貸与することを提案した。

フィンランドの世論は領土割譲に反発し、3月の交渉は結果が出ないまま終了した。

フィンランド国防評議会のカール・G・E・マンネルハイム元帥はフィンランド内戦時の白軍、すなわち資本主義陣営の「白の将軍」として知られていた。

彼は自国に戦争に耐えうる力が無いことをよく認識しており、湾岸の最外周の島々をソ連に割譲すべきと進言した。

そのため1939年10月にモスクワ会談への招待状が届くと、指導者たちはソ連側にフィンランドの防衛準備が整っているように見せかけるため、フィンランド軍に追加の再訓練を命じた。

しかし偶然を装ったそれは、戦争へと備えた偽装動員にほかならなかった。

そしてそれによってフィンランド軍は最終的には避けられない戦いに備え、戦場の地形に慣れることができた。訓練中、防衛拠点の強化も行われた。

1939年の10月の交渉は3つの議題に分けて行われた。

まずソ連はフィンランドに対し、カレリア地峡の一部とフィンランド湾の外島を割譲するとともに、ハンコ半島とラッポーヤ港を租借することを要求した。

第二にその見返りにソ連は、レポラ市やポラヤルヴィ市など、東カレリアが独立を要求していた土地よりも多くの領土をフィンランドに提案した。

これらの地域は1918年から1920年にかけてソビエト・ロシアからの独立を目指していたが、タルトゥウ平和条約により依然としてロシアの支配下にあった。

しかし最終的にフィンランド政府は、国民と議会の反対によってこの提案を拒否した。

彼らは代わりに、辺境の町テリヨキ（共産主義による傀儡政府であるフィンランド民主共和国の本拠地）とクオカラ突出部の割譲とともに、レニングラードに最も近い地域におけるフィンランドとソ連の国境の調整を提案した。

不毛な交渉は1939年11月9日に終わった。

フィンランド代表団はヘルシンキに戻ったが、最後の会談中にソ連外相ヴィャチェスラフ・モロトフが発した不気味な言葉が頭の片隅に残った。

「文民当局は問題解決のためのあらゆる検討を行ったが、結果は得られず、現在その任務は軍に委ねられている。」



現在のロシアにおける歴史研究では、最終的に10月末にフィンランドとの戦争計画が承認されるまで、交渉による解決の余地があったとされている。しかし実際には、すでに1939年の夏にはソ連はフィンランド攻撃を準備していた。

交渉決裂後ソ連は対フィンランドの大規模なプロパガンダを展開し、海外および、国民に向けたキャンペーンを開始した。

このキャンペーンにはフィンランドの政治指導者を告発するさまざまな捏造や、フィンランドによる無神論者への残虐行為など虚偽の主張が含まれていた。

偽情報キャンペーンはマイニラ砲撃として知られる辺境の事件で最高潮に達したが、これはフィンランドを侵略者として演出し、それによってソ連に戦争の口実を与えることを目的とした挑発であった。

フィンランドに提示されたソ連のメモによると、1939年11月26日にフィンランドの砲兵隊がフィンランドとロシアの国境近くのロシアの村マイニラに向けて発砲し、ソ連の辺境警備兵4名を殺害したとされている。

実際にはフィンランド軍砲兵隊は事件当時、マンネルハイム元帥の特別命令によって辺境から離れた場所に駐屯しており、理論上軍の指示による射撃は不可能であり、この騒動はソ連の仕組んだものであることが証明された。

その後の歴史研究でも犠牲者の報告が虚偽であったことが判明している。

しかしこの事件は、ロシア政府を戦争挑発者として非難するフィンランドの多数の外交文書を遠ざける口実を与えた。

さらにソ連は、1932年にフィンランドとソ連の間で締結された不可侵条約を一方向的に破棄した。

フィンランド政府はこの出来事を調査するために中立委員会を招集するよう提案したが、提案は拒否され、1939年11月30日にソ連軍は正式な宣戦布告無しに、さまざまな場所でフィンランド国境を越えた。冬戦争が始まった。

最初の戦い

ソ連軍の攻撃は3つの地域に集中した。

最北端のスオミッサルミ方面への侵攻はフィンランドを分断し、南下してスウェーデンと地続きの土地を占領する事を目的としていた。

南東部のラドガ・カレリア地域では、ラドガ湖の北岸を側面機動することによって、ラドガ湖南側のカレリア地峡を防衛するフィンランド軍に背後から攻撃する事を企図していた。

そして最南端のカレリア地峡では可能な交通機関を利用して正面から首都ヘルシンキへ侵攻することを目的としていた。



当初、主に召集兵で構成されたフィンランド軍の援護部隊は全戦線から後退し、圧倒的な敵の進軍を遅延させるため、焦土戦術によって攻撃側が利用する可能性のある住居をすべて焼き払った。

交戦が始まるまでは多くの地元民が辺境に住んでいたが、援軍が戦闘を行っている間に避難した。

12月初旬に戦闘の援護段階が終了すると、戦闘部隊は予備役連隊への移管が進められた。

フィンランドの防衛の主線は、カレリア地峡をまたぐ一連の防

御要塞と要塞、いわゆるマンネルハイム線であった。

この要塞線はフィンランド軍の最高司令官となった有名な軍人にちなんで名付けられた。

フィンランドの第2の拠点は、ラドガ・カレリアからコッラー川まで形成され、後に「コッラーは保持する」(フィンランド語: 'Kollaa kestää' コッラー・ケスタ)というスローガンで有名になった。

ソ連は12月6日にタイパレ川沿いの東側地峡突破の最初の攻撃を行ったが、2日後に失敗に終わった。

12月15日と17日の2回の挑戦もフィンランド守備隊の勝利に終わった。

西部地峡に対する赤軍の攻撃の中心であるスンマ村での戦闘は12月17日に始まり、12月22日に赤軍が攻撃を停止するまで続いた。

ソ連軍の前進が阻止されると、マンネルハイムは反撃を許可した。

2つの予備師団によって強化された地峡軍の第2軍団は12月23日に反撃を開始した。

しかし計画、偵察、兵站の欠陥によりフィンランド軍の反撃は頓挫し、第2軍団は大きな損失を被った。

この大胆だが準備不足の行動は、後に「愚か者の用事」(フィンランド語: 'Hölmön tölväys')と名付けられた。

フィンランド軍はトルヴァヤルヴィの戦いによりラドガ・カレリアで初めて大きな攻撃的勝利を収め、パーヴォ・タルベラ大佐の率いるいわゆるタルベル集団が12月22日までの交戦で赤軍第139歩兵師団を破った。

この勝利は大きな意味を持った。

一つにはフィンランド軍兵士の士気と自信を高めたこと。

もう一つは、赤軍がフィンランド軍を後方から攻撃するという恐怖が少なくとも一時的に軽減されたことである。

その後ラドガ・カレリア地域の戦闘は「モッティ」戦術、つまり包囲戦に移行し冬戦争の終結まで続く。

北部戦線では、フィンランド軍は1939年12月27日~29日のスオミッサルミの戦いと1940年1月1日~7日のラーテンティの戦いで重要な勝利を収め、どちらも国際メディアの注目を集めた。

フィンランド側ではこれらの作戦はヤルマル・シーラスヴォ大佐の第9師団によって実行された。

赤軍の第163歩兵師団と第44歩兵師団は比較的少数のフィンランド軍部隊によって壊滅し、驚くべき戦利品が得られた。

ラドガ・カレリアとスオミッサルミ間の一連の戦闘は、フィンランド軍の「モッティ」戦術の実践と、厳冬を利用した戦術の好例を描いている。

これらの戦いやラドガ・カレリアの戦いでも、優れた火力を備えたフィンランドのスキー部隊が敵軍を容易に包囲した。

敵軍は数と自動車化で圧倒していたが、厳寒の地形での移動には不慣れで、長い縦列を組んで道路を前進するしかなかった。

ラーテの戦いでソ連は攻撃を中止し、軍隊の再編に集中した。



冬戦争の国際的なイメージ

第二次世界大戦の他の戦域は、1939年から1940年の冬にはまだ静かだった。その結果フィンランドとソ連の戦争が国際的に注目され、特にフィンランド人の闘争心は大きく称賛された。

国際連盟はソ連の攻撃を違法とみなし、同国を国際連盟から追放して他の加盟国にフィンランドを支援するよう奨励した。

多くの国が人道援助や義勇軍の形で支援を送り出した。

フィンランドはいくつかの兵器を受領したものの、援助の多くは戦争が終わってから到着した。

作戦上最も貢献したのはスウェーデンの志願兵とその飛行連隊 F19 であった。F19 飛行連隊は 1940 年 1 月中旬にスウェーデンの砲兵部隊とともにラップランドの航空防衛を担った空軍部隊である。

サラの最前線の防衛はスウェーデンのボランティアに引き継がれた。

ソ連は国際社会から支持を得られるよう努力した。

モスクワは攻勢開始の初日からこれは戦争ではなく、逆に共産主義であるフィンランド人民政府へ援助を差し伸べているのだと宣言していた。

フィンランド人民政府は政府が置かれた町の名をとってテリヨキ政府と呼ばれた。

ソ連の声明によると、赤軍はフィンランドの労働者階級の招待によって侵攻したものであり、伝えられるところによれば、現在この国の権力を掌握しているフィンランド共産主義者から具体的な要求がなされたという。

実際のところフィンランド生まれの政治家オットー・ヴィレ・クーシネンが率いるテリヨキ政府は、ソ連が創設・承認した傀儡政権であり、1918年のフィンランド内戦中にソビエト・ロシアに亡命したフィンランドの共産主義者で構成されていた。

これの主張はソ連以外の国からは信頼を得られず、最終的にはソ連の国際的評判を損なうものとなった。

2月のソ連軍の突破

赤軍は当初、モスクワが迅速な勝利を信じていたため、かなり限定的な戦力でフィンランド侵攻を開始した。

しかしそのような期待に見込みがないことが判明し、1940年1月、赤軍はフィンランドに対抗して、当時のソ連の観点から見てもはるかに巨大な軍隊を召集し、再編した。

26個ものソ連軍師団、4,000門の大砲、1,000～1,200両の戦車がかレリア地峡に集結した。

2月、赤軍はヴィボルグ市近郊のスンマを重点に大規模な攻撃を開始し、前線の6キロメートルに3個師団、1,000門の大砲、200両の戦車を投入した。

攻撃部隊はフィンランド中部のハメに編成されたフィンランドの1個師団、第3師団と対峙した。



ソ連の決定的な攻撃に先立って、2月1日から大規模な砲撃と空爆が開始され、その後2月11日に総攻撃が開始された。

赤軍は侵攻初期段階の経験に基づいて機甲部隊と歩兵の協力を強化しており、これらの新たな戦術と赤軍の火力の優位性により、ソ連軍は主力戦線を突破した。

2月11日午後までにソ連軍はフィンランド軍の防衛線を破壊した。

フィンランド軍の反撃は失敗し、2月15日マンネルハイム総司令官は二次防衛線への撤退を許可した。

しかしソ連の大規模な攻撃に直面して主線ほど強化されていない副線も崩壊し、2月27日フィンランド軍はヴィボルグからタリ、ノスクアンセルカ、クパルサーリを経てヴオクシに至る後退線に引き下がった。

フィンランド兵は予備が不足しており、大砲の弾薬も不足しており、対戦車兵器は切実に必要だった。地峡の東側を防衛し、マンネルハイム線に残っていたフィンランド第3軍団はソ連軍に包囲される危険に晒され、フィンランド第2の都市ヴィボルグもその危険に直面していた。

どちらも赤軍に捕捉され、状況は危機的であった。

平和への道

最終的には1939年～1940年におけるフィンランド軍の防衛戦の勝利によって妥協への扉が開かれた。

ソ連の指導者スターリンがフィンランドの迅速な征服は不可能であると理解したとき、他の案が議題に上がった。スウェーデンのストックホルムに駐在するソ連大使アレクサンドラ・コロンタイが仲介を申し出たことにより、交戦当事者間の対話が成立した。

スターリンはもはやクーシネン傀儡政府に固執せず、フィンランドの法定政府と交渉する用意があった。

スターリンを和平交渉に向かわせたのは、おそらく何よりも西側連合国がフィンランドの戦争に介入することへの恐怖だった。

ソ連の指導者はイギリスとフランスが西側諸国による戦争介入のため、フィンランドへの派兵を準備していることを知っていた。

赤軍のエネルギー供給を断つためにソ連の油田を爆撃することも計画されていた。

イギリスとフランスはフィンランドへの支援がソ連の同盟国であるドイツへの対抗手段であると考え、戦争継続のために支援を受け入れるよう説得を試みた。

しかしながらフィンランドの軍事状況は上述のように、ソ連の大規模攻撃以降劇的に悪化しており、完全な軍事崩壊までは数日と持たない見通しであった。

おそらく人的資源の不足のため外国からの増援は既に遅すぎ、増援の一部は実際にはスウェーデンの鉄鉱石鉱山の占領によるドイツへの輸出阻止が目的であると判明したとき、フィンランド政府にはもはや、ソ連が提示した和平条件を受け入れる以外に選択肢は無かった。

この条件に従ってフィンランドはカレリア地峡全体、ラドガ・カレリア、バレンツ海のリバチ半島、サッラ地域の一部、およびフィンランド湾の多くの島をソ連に譲渡した。

40万人以上のカレリア人避難者が家を失った。

この重い条件は、ソビエト連邦にこれまで軍事的な征服で得たよりはるかに多くの領土獲得をもたらした。

違法な侵略戦争による苦い和平の結果は多くのフィンランド人の心に、大国間の状況さえ許せば奪われた領土を奪還するという考えを呼び起こした。



戦争の意義

105日間続いた冬戦争は双方に大きな被害と死傷者をもたらした。

戦時中の総兵力約33万7,000人～34万6,000人のフィンランド軍は約2万5,000人を失い、さらに4万3,000人が負傷した。

さらに空襲によりフィンランド民間人957人が死亡した。

ソ連側では、戦争中の赤軍の兵力は約100万人で、そのうち約12万6,000人が死亡、26万5,000人が負傷した。膨大な死傷者にもかかわらずソ連は諦めなかった。

フィンランド征服計画について、戦争中および戦後にいわゆる「冬戦争の奇跡」（フィンランド語: 'talvisodan ihme'）という神話が

生まれた。

神話によれば、圧倒的に強力な敵に対する小国フィンランドの勇敢な戦いと防御の成功は、まさに超人的な成果であり、奇跡的な勇気の現れであった。

しかし、軍事史家も政治学者も現実の戦争の経過については合理的な説明を行っている。

その事実はここまで述べたとおりである。

この戦争の真の教訓は、戦争における国家の精神的資源の重要性を浮き彫りにしたことであった。

戦争の間、そして戦争が終わった後も、フィンランド国民は独立以来これまでに無いほど心理的に団結していた。

しかし、この「冬戦争の精神」の根本は戦争直前よりもはるかに深いところから発していた。

1930年代以降、フィンランド国内政治における左派と右派の両政党は、内戦の記憶によって生じた分断を越えて互いに接近するようになった。

スターリンの粛清に関する情報を含む大国間のニュースはフィンランドの政党に伝わり、政治的スペクトルの両端にいる過激派への国民的な同情と支持が減少した。

良好な経済発展によってもたらされた生活水準の向上と国内の安定した雰囲気は、フィンランド国民の大多数が外交・安全保障政策における共通の目標に向かって団結することを促し、開戦後はそのような目標を守るために共に戦う国民意識が生まれた。

価値観の変化、とりわけ1930年代を特徴づけていたフィンランド軍の資金調達と維持をめぐる論争は冬戦争後に沈静化し、急いで再軍備が行われるようになった。

一方でフィンランド指導部は、冬戦争で自国が孤立したまま超大国と戦争に至った状況を二度と繰り返さないよう努めた。

冬戦争後、フィンランドとソ連の関係は歴史的な冷え込みに達したが、両国とも関係改善を求めず、逆に全く異なる解決策を模索した。

1940年春にドイツがデンマークとノルウェーを占領したため、フィンランドが英仏介入軍から支援を得る機会は失われ、フィンランドはドイツに支援を求めることになった。

これは最終的にフィンランドとソビエト連邦の間の継続戦争（1941年から1944年）へと繋がった。第二次世界大戦の開始は引き続きフィンランドとソ連の運命に直接影響を及ぼした。

そしてフィンランドとソ連による冬戦争も、第二次世界大戦の国際情勢に影響を与えた。

ヒトラーはフィンランドに対する赤軍の戦いからソ連を「粘土の足をもった巨人」とみなし、これが1941年夏にソ連を攻撃するというドイツ人の決意を強めた。

ラウトウエンティの戦いで、いわゆる「フィンランド・サブマシンガン」を装備したフィンランド打撃軍による攻撃により、赤軍は戦闘資材としてのスキー板とサブマシンガンの重要性を再考することになった。

ソ連軍はまた、歩兵の訓練が不十分であったことや、赤軍の指揮系統の硬直性と弱点によって引き起こされた多大な死傷者の教訓も学んだ。

冬戦争: 1939年11月30日 - 1940年3月13日

フィンランド	ソビエト連邦
戦力	戦力
フィンランド兵士 - 337,000-346,000	兵士 1,000,000 (同時にではなく戦争期間中の合計)
外国人志願兵 (主にスウェーデン人) 12,000	
指導者	指導者
C.G.E.マンネルハイム	ヨシフ・スターリン
ヤルマル・シーラスヴォ・ハラルド・オクヴィスト	クリメント・ヴォロシロフ
パーヴォ・タルベラ	キリル・メレツコフ
	セミヨン・ティモシェンコ
損害	損害
死者・行方不明者 25,904名	死者・行方不明者 176,976名 捕虜 5,000名
捕虜 1,000名 負傷者 43,557名	負傷者 188,671名 注: ソ連軍の損失数は情報源によってかなりのばらつきがある
民間人 957名 (爆撃で死亡)	

原文の英語翻訳: ローラ・イパッティ

写真のクレジット

フィンランド国立古遺物委員会、国立古遺物画像コレクション、パウトヴァーラ・マッティ歴史画像コレクション。

イワン・ヴァシリエヴィチ・シマック。SA画像: オリ・クレモラ。

日本語の翻訳: 三好秀一(本資料は google 翻訳機能を参考に作成しました)